

一、次のア～コの傍線部分を漢字で正確に記しなさい。

- ア、友人をアイシヨウで呼ぶ イ、事務所をカセツする ウ、車がコシヨウする エ、税金をオサめる オ、機械をソウサする
カ、強いイシで成しとげる キ、イチドウに会する ク、シュウチ徹底させる ケ、テツボウの練習に励む コ、意見をハンエイさせる

二、次の文章を読んであとの各問に答えなさい。

(前略)

ところで、いまの社会で「君」や「ぼく」が幸せに生きるってどういうことだろう。社会学者はこれまで「人が幸せに生きるのはどういうことなんだろう?」と絶えず考えてきた。そのひとりであるぼくは、「人が幸せに生きる」ために2つの条件が必要だと考えてきた。

まず「**a**」であること。たとえば大昔の人たちは学校に行かなかった。当たり前の話だけど、学校がなければ学校には行きようがない。学校がない時代の人は、**I** 学校に行くという**選択肢**がないから、学校に行かないことを「**b**」**【**だとは思わなかった。

やがて、お金持ちの家の子は学校に行けるけど、貧しい家の子は行けない、という時代がやってくる。ここで、学校に行くという**選択肢**を知っているにも**選べない**という「**c**」**【**感**】**が生まれる。逆にいうと「**選択肢**を知っている、それを**選べる**」から「**d**」**【**なんだね。

時代が変わって、多くの人が学校に行くようになると、学校には行っているけれど、何を学んでいるかわからないという状況が生まれる。ということは、「**自由**」であるには、「**選択肢**を知っている、それを**選べる**」以外に「**選ぶ能力**」があることも重要だということだ。

テレビの例がわかりやすい。いまの時代、ほとんどの家にテレビはあるし(自分の部屋にもあったりワンセグで見たりもする)チャンネルも何百とあるけれど、どの番組を見たらいいのか、何を**楽しめばいい**のかわからない——そう感じたことって君にもあるんじゃないかな。

① いま、ぼくたちが生きている社会は、まさにこの段階にあるんだ。実際、ぼくが教えている大学でも、高校まで同じクラスでいっせいに授

業を受けてきた学生が、入学したとたんに、どの授業を選べいいのかわからなくなって、相談室にかけこんだりするのを見てきた。

君がそうならないためには、いまのうちから「自分で選ぶ」訓練をすることが大切だ。君は、楽しいにしろ、つらいにしろ、いまそこにいる、ある環境を生きている。この環境は君が作ったものじゃない。でも、「ただ受け入れている」のは君だ。つらいのは誰のせいだろう。

ここで3つの考え方があある。1つは、環境を作った大人たちが悪い、というもの。もう1つは、環境をつらいものだと感じる君自身の境地が問題だ、というもの。最後の1つは、環境を変えようとする消極的な君が悪い、というもの。いつもこの3つがあるんだよ。

環境を作った人たちが悪いんだ——そうだろう。でも、責任を取らないで問題を先延ばしにして子どもや子孫たちに不幸をおしつけるような大人たちは、どんな時代にもいる。君自身だってそんな大人にならないとは限らない。^②いつまでもそれを続けていいのか。

君は運動部系の部活動をしているかもしれない。ぼくも空手道部だった。雪の中で砂場に水を張り、腰まで水につかって練習した。「つらいと思うからつらいんだ！」と先輩に怒鳴られた。先輩のいう通りだった。修行を続けるとだんだんつらくなくなってきた。

自分を強くすることを目的とした修行だから、そうした感じ方はいいことだ。でも、^③いつもそのように考えるのはマズい。本当はひどい環境を作った悪いヤツがいるのに、君が修行でたえてしまえば、悪いヤツがほったらかしになる。悪いヤツはなんとかしなきゃいけない。

いまの社会は昔に比べて選肢が増えた。いいことだ。でも君は選肢をちゃんと「知っている」だろうか。知っていたとして、選肢を「選ぶ能力」はあるだろうか。それ次第では、君はとんちんかんに「他者のせい」にしたり「自分のせい」にしたりしかねない。

Ⅱ、単に「自由」にふるまうだけじゃ、君は幸せになれないんだ。そこで「人が幸せに生きる」ために必要な条件を「尊厳(自尊心・自己価値)」ということを軸に考えてみよう。自由だけで尊厳が得られるだろうか。自由と尊厳はどんな関係にあるのだろうか。

選肢を知っていて、選ぶことを邪魔するものがなく、選ぶ能力があることが「自由」だといったよね。自由であるにも、能力が必要だということだ。そういう能力がとぼしい人はどうしたらいいのか。修行すればいいのか。修行している途中で死んだらうかばれないよ。

能力によって自由を楽しめる度合いが違ってくる。これは本当のことだ。でも能力がとぼしいからといって過剰にみじめにならず、自分がそこにいってもいいんだ、自分は生きていていいんだ、自分は他者に受け入れられる存在だ、と思える。それが「尊厳」ということだ。

^④自由だけじゃ、みんなが幸せになるのは無理だ。自由が別の人の自由をおしのけないようにルールを調整するのは大切だけど、それだけじゃ足りない。Ⅲ、社会には文化があって、「X」が上手な人が得をする文化の国もあれば、協調性が高い人が得をする文化の国もある。

宗教も文化の一種だ。キリスト教の国ではキリスト教徒は生きやすいけど、イスラム教徒は生きにくい。イスラム教の国ではイスラム教徒は生きやすいけど、キリスト教徒は生きにくい。みんなに平等に「Y」をあたえても、社会ごとに誰が自由に生きやすいかわ変わるんだ。

みんなが尊厳をいだいて生きられるようにするには、自由を尊重しようというだけじゃ足りない。社会が一色の文化に染まっていれば、別の文化の人は生きにくくなる。どんなに「自由にしてもいいですよ」といわれても、自由を利用できるチャンスが限られてしまうからだ。

自由だけじゃみんなの尊厳を支えられない。Ⅳ 社会学では、みんなの——より多くの人たちの——尊厳を支えるには、「自由」と「多様性」の両方が必要だと考える。自由だけだと、多数派や強い人たちの色に社会が染まりすぎる。いろんな色が必要なんだ。

(宮台真司「14歳からの社会学」より)

問一 空欄Ⅰ～Ⅳに入るべき語句として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使わないこと。

ア、たとえば イ、ところが ウ、そもそも エ、そこで

問二 空欄a～dに入るべき語句の組み合わせとして、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ア、 | a | 不自由 | b | 自由 | c | 自由 | d | 不自由 |
| イ、 | a | 不自由 | b | 自由 | c | 不自由 | d | 自由 |
| ウ、 | a | 自由 | b | 不自由 | c | 自由 | d | 不自由 |
| エ、 | a | 自由 | b | 不自由 | c | 不自由 | d | 自由 |

問三 空欄 X・Y に入るべき語句を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------|---|-------|
| X | ア、自己主張 | Y | ア、生命 |
| | イ、手練手管 | | イ、権利 |
| | ウ、環境順応 | | ウ、幸福 |
| | エ、調整能力 | | エ、ルール |

問四 傍線部①「いま、ぼくたちが生きている社会は、まさにこの段階にあるんだ」とあるが、「この段階」とはどのような内容を指すか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、限りある選択肢を知っているにもかかわらず、それらを自分に合うように選ぶことができず、何もなす術がない状況。
イ、たくさんの方を選択肢を知っていて、それらを選ぶことができるが、結局は一つしか選べないという状況。
ウ、多くの選択肢を知っていて、それらを選ぶことができるが、どのように選ぶべきかが分からない状況。
エ、数少ない選択肢しか知っておらず、どれを選ぶにしても、限られた結果しか得ることができない状況。

問五 傍線部②「いつまでもそれを続けていいのか」のような表現方法を何というか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア、逆説法 イ、省略法 ウ、反復法 エ、反語法

問六 傍線部③「いつもそのように考えるのはマズい」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、環境をつらいと感じることを大人のせいにするだけでなく、現状の問題点を未来の人たちへ課題として引き継がなければ本質的問題は解決しないから。

イ、環境をつらいと感じることを自分の弱さのためだと考えているだけでは、現状の問題点が見えず環境をよい方向に変えていくことにつながらないから。

ウ、環境をつらいと感じることを自分の責任として引き受けようとしなければ、現状の問題点は放置されいつまでも環境改善の方向へは歩み出せないから。

エ、環境をつらいと感じることを誰かに押しつけるのではなく、自分を含めた全ての人々が現状の問題点を乗り越える修行をしなければ前には進めないから。

問七 傍線部④「他者」と同じ内容を表している部分を文中から五字以上十字以内で抜き出さない(句読点も字数に含む)。

問八 傍線部⑤「自由だけじゃ、みんなが幸せになるのは無理だ」とあるが、筆者は「幸せになる」ためには他にどのようなことが重要だと述べているか。なぜ筆者がそれを重要だとするのか、理由を明らかにしながら、六十字以上八十字以内で説明しなさい(句読点も字数に含む)。

三、次の文章を読んであとの各問に答えなさい。

線路わきのゆるい坂道を、連れ立った小学生が下りて来る。

落葉の始まった桜並木に沿って、黄や緑、赤などに着膨れた男の子や女の子が、前向きになったり、後ろ向きになったり、くるくる回りながら声高く下りて来る。卵色に紺色、それに鼠色の子もいる。陽は西に移っていた。

切り通しの線路なので、電車の音はいつも坂の下を流れてゆく。下りと上りの電車が擦れ違ふと話し声は途絶えた。誰かが口を噤み、誰かがそれに倣い、次々に倣って高まった音の流れが消えるのを待った。誰かともなく柵に寄って、

I 下を覗いている。

「ぼく、ずっと前、空にいる象を見たことがあるよ」

「ええっ？ 象を？ うそ！ そんなのうそ！」

と黄色に膨んだ女の子が叫び、そのあと、「うそだあ！ うそだあ！」の声が続いた。

空は深く晴れている。

うそだあ！ と声を合わせた者も合わせなかった者も、一樣にその空を見上げている。ここからは見えないが、小学校の校庭には、まだ運動に熱中している生徒達が残っていて、彼等のあげる喚声は、この坂道にも時々もつれ合いながら伝わってきた。

「うそじゃない。本当なんだよ」

II 言い返している男の子に、大柄な鼠色の男の子が、低い、太い声で言った。

「あるわけないだろう、そんなこと。夢？ それとも……」

「ぼく、見た。テレビで見た。象が、象が空にいたんだよう」

「なあんだ、テレビか。そんならそうと早く言えよ」

そんならそうと、と言いはしたものの、想像が追いつかないので、彼は半分だけ納得し、半分は不貞腐れている。

「ねえ、聞いて聞いて。あたしなら空を泳いでいるピアノを見たことがあるわ」

左右の者を制するように、赤いマフラーの女の子が言った。低い、太い声が続いた。

「テレビや映画の話ならよせよ」

「違う。あたしはねえ、おばあちゃんのうちの二階の窓から、ちゃんこの目で見てたんだから」

今度は周りも「うそだあ！」とは言わなかった。しかしそれは、この女の子の言ったことを誰もが認めたからではなかった。左右からの冷たい視線に、女の子はひるんだ。象を空に見たと言った少年も、空を泳いでいるピアノを見たと言った少女も、友達の意外な反応に出鼻を挫かれ、氣勢を削がれて、それぞれあとを言いそびれてしまった。どちらも少しずつさびしかった。

いつのまにか小学生達は、又くるくる回りながら、再び坂を下り始めていた。彼等が背中のかげに吊り下げている布袋入りのカップは、回り方が強いと、伸び切った吊り紐の先で円を描いた。大柄な男の子のカップが、卵色の女の子の腕に当たった。

「許せ」

と強気に言い捨ててから、彼はにわかには首をすくめ、腰を折ってその少女の前に回り、掌を合わせると、

III

「ごめんね」と言った。

少女は笑顔を見せただけで何も言わなかった。この少女は、少し前、柵に寄りかかった友達が「うそだあ！」と声を合わせていた時、象を見たという少年の言葉を、すぐに否定はできなかった。自分に同じ経験があったのではない。ただ、見る、見えるということに関して、少女には日頃から迷いがあった。たとえ自分に見えても人に見えないものは、見たことにはならないのか。もし自分が間違っているのなら、間違いとそうではないという見分けはどこでどうつけられるのか、という疑問があって、当然答は簡単には得られないので、迷いは消えそうもないのだった。

少女は、みんなにうそだとはやされている少年についてこう思っていた。日頃の態度や物言いかからすると、彼は見えないものを見たとは言わないだろう。人をびっくりさせたり、騙したりするのがうれしい友達ではない。それともう一つ、自分も彼のように、空に象を見たらいいなという漠然とした羨しさもあった。

IV

この少女にも、言いたいことがないわけではない。けれども疑われたり、うそつき呼ばわりされたのでは、言おうとしている中味そのものがかわいそうなので、やはり言うのはやめようと思ひ、ひとり胸のうちに繰り返していた。「わたしは、木になった魚を見たのよ」

緑の少年が見たというテレビの映像の象は、波止場で起重機船のクレーンが宙に吊り上げている象だった。どこから船で運ばれて来て、どこ動物園へ連れて行かれたのか、それがアジアの象だったのかアフリカの象だったのか、そんなことはもう覚えていない。

象の檻は、頑丈そうな太いロープでつくられた網の中だった。陸揚げされる時、起重機船のクレーンは、網ごと象の檻を吊り上げていた。象の胴体には幅広い帯状のものが巻きつけてあって、そこにも吊り具はかけられていた。垂直に高く吊り上げられた象は、クレーンの操縦に従い、水平に移動してから、陸の側で再び垂直に下ろされた。象は確かに、ひととき波止場の中空に位置していた。

象の話聞いた赤いマフラーの少女は、今ならばあの事が言えそうだと思った。もう一度見ることはないだろう。あまりに思いがけなくて、だからとても上手に人にも話せなかったのに、突然それを言いたくなった。

少女のおばあさんの家は、空き地に挟まれた私道の奥にある。二階の洋間にピアノは据えられていた。おじいさんが娘のために特別に作らせたピアノだったが、娘は大学を出ると勤め先の外国人と仲好くなり、結婚するとピアノを置いて夫婦でヨーロッパに行ってしまった。姉に続いて弟も結婚すると家を出た。この息子夫婦が少女の両親になる。

おじいさんは前の年に亡くなっていて、おばあさんには引越しが迫っていた。少女はひとりになったおばあさんと一緒に暮らせるようになって思っていたが、おばあさんは、食事の世話をしてもらうだけでなく、病気になった時の手当てや看護もしてもらえる老人のための「ホーム」に移るのだという。

予定していたピアノの譲渡先が、急に海外勤務を命じられて取り込みになったため、とりあえず貸し倉庫に預けることになった。おじいさんの病気が長かったので、病人本位の建て増しや改造を繰り返すうちに、最初運び込んだ表玄関から運び出すのは難しくなっていた。ピアノ運搬専門の業者を呼んで相談した。業者の話聞きながら、おばあさんは軀のしんが冷えてゆくように感じた。

業者は説明した。

まず、家屋に近い空き地の一劃にクレーン車を設置する。二階の、ピアノが置かれている部屋の、庭に面した窓の硝子戸を全部外す。ピアノにワイヤーロープをかける。庭の上空にもロープを渡して、荷造りしたピアノと傾斜させたクレーンとを繋ぐ。振りを利用していきなり二階の窓からピアノを宙に送り出す。そうして一旦高く吊り上げたピアノを、今度は私道の外の舗道まで移動させてゆくのだという。

おばあさんは、その日が近づくにつれて、不安で夜も眠り難くなった。空き地の所有者への挨拶もすませはしたものの、ワイヤーロープが切れたらどうなるのか。業者は珍らしい扱いではないと言った。いくら慣れた扱いだと言われても、こういう扱いそのものがピアノに対しても、おじいさんに対しても申し訳なく、取り返しのつかないことになったとかなしみ、沈んだ。

外国暮らしは所詮無理としても、息子が望む一緒に生活を思わなかったわけではない。けれども長年の生活習慣の違いは、老いた身には想像以上の耐え難さに思われる。一時の甘えが家族を毀す恐れにとらわれて、おばあさんは外の「ホーム」を選んだ。息子夫婦は落胆を示し、妻は心の底で安堵した。息子もいくらかは安堵した。土地も家屋も、すでに「ホーム」生活の基金に当てられていた。

孫の少女は、どうしておばあちゃんは今来ないの？と幾度も両親にたずねたが、その度に息子夫婦は、おばあちゃんにはお友達との約束があるからなどというあいまいな返事でごまかした。

いよいよ作業が始まると、おばあさんはピアノの見えない部屋に引き籠ってしまった。休日だったので、少女を連れて来た息子が業者に会った。

二階から二人の業者の手で宙に送り出されたピアノは、振りさながら庭の上空を斜によぎってクレーン車の本体に近づき、吊り上げられたままの状態で空き地の上を舗道まで運ばれて行った。

二階の部屋で業者の作業を父親と見守っていた少女は、ピアノが宙に送り出される時、息が詰りそうだった。おばあさんのことも、家に残っている母親のことも、友達のこと、頭のどこにもなかった。自分も一緒に空の中に送り出されそうだった。宙にゆらりと大きな弧を描いて、下の芝生や花壇、庭木から遠ざかっていったピアノは、少女の目には、その時紛れもなく空を泳いでいた。

(竹西寛子「木になった魚」より)

問一 空欄Ⅰ～Ⅳに入るべき語句として最も適切なものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使わないこと。

ア、猫撫で声で イ、真顔で ウ、みんなの前で エ、並んで

問二 傍線部 A・B の語句の文中における意味として、最も適切なものを各語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

A	にわか	ア、ゆっくり	B	所詮	ア、逆に
		イ、出し抜けに			イ、多分
		ウ、にこやかに			ウ、残念ながら
		エ、おうへいに			エ、相変わらず
		オ、わざとらしく			オ、結局のところ

問三 この作品の舞台となっている季節を次から選び、記号で答えなさい。

ア、晩春 イ、初夏 ウ、晩夏 エ、初秋 オ、初冬

問四

傍線部①「彼は半分だけ納得し、半分は不貞腐れている」とあるが、「彼」の心情の説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア、テレビの中とはいえ空にいる象を見た友達に対し、自分はそうした珍しいものを見たことはなかったので悔しい。
 イ、テレビの世界にしても空にいる象は作り事であると決まっているのに、それが分かっている友達が腹立たしい。
 ウ、空に浮かぶ象はテレビの世界では存在するだろうが、現実にはあり得ないので期待させないでくれと思っている。
 エ、テレビなら空にいる象が映ることも理解できるが、具体的な映像が思い浮かべられなかったのでいらだっている。
 オ、テレビで見た空に浮かぶ象を、まるで現実の世界で見たように言って混乱させないでほしいと切実に願っている。

問五

傍線部②「それぞれあとを言いそびれてしまった」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、友達が象やピアノの話を知っていると聞いてくれると思っていたが、全く反応もなく無視されるような事態になってしまったから。
 イ、友達が象やピアノの話にもっと興味を示してくれると思っていたが、信じてくれずむしろ反発を買ってしまったから。
 ウ、友達が象やピアノの話に大きく注目してくれると思っていたが、適当に話を流されてしまうような状況になったから。
 エ、象やピアノの話が友達に信じてくれたと思っていたが、それは形だけで実は疑われているということが分かったから。
 オ、象やピアノの話が友達に喜んでくれると思っていたが、それどころかかなり冷やかに受け止められてしまったから。

問六

傍線部③「少年の言葉を、すぐに否定はできなかった」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として不適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、少女には他人に見えるものと自分に見えるものの違いについての迷いがあったから。
 イ、少女は自分まで少年を否定したら彼を追いつめてしまうのではないかと考えたから。
 ウ、少年は人をびっくりさせたり騙したりして喜ぶような子どもには見えなかったから。
 エ、少年が空飛ぶ象を見たことに対して少女は羨ましいような感情を持っていたから。
 オ、少女にも人が簡単に信じないようなものを見たというよく似た体験があったから。

問七

傍線部④「おばあさんは軀のしんが冷えてゆくように感じた」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、おばあさんにとってピアノは亡きおじいさんの形見とも言えるかけがえのない存在であり、引越のためそれと別れることになりやるせない気持ちになってしまったから。
 イ、おじいさん愛用のピアノが粗末な扱いを受けてしまうことに対して、おばあさんは運搬を行う業者やそれを指示した息子夫婦に怒りと同時に深い悲しみを覚えているから。
 ウ、おばあさんはピアノに特別な思い入れがあるだけに、宙づりにして運搬するという事について購入したおじいさんやまたピアノに対してもし訳なさを感じているから。
 エ、ピアノを手放さざるを得なくなったことはおばあさんにとって無念であり、今後の「ホーム」での人生にまで深い絶望感を抱いてしまうような心境に陥ってしまったから。
 オ、大切なピアノと離れる段取りを業者相手にたった一人で行うことは大変わびしく、おばあさんは自分の世話を断念した息子夫婦を悲しく思い孤独感を抱いてしまったから。

問八

傍線部⑤「息子夫婦は落胆を示し、妻は心の底で安堵した。息子もいくらかは安堵した」とあるが、息子夫婦の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、おばあさんが「ホーム」を選んだことに悲しみを感ずる一方で、自立した人生を望むおばあさんの意志や潔い判断を尊重したいと思っている。
 イ、おばあさんと共に暮らせないことを残念に思う一方で、「ホーム」での生活の方がおばあさんの心身によい影響を及ぼすことを確信している。
 ウ、おばあさんから共同生活の申し出を断られたことに傷つく一方、自分たちとよい関係を保つための選択だったと知り思いやりに感謝している。

エ、おばあさんと一緒に生活できないことに失望する一方で、おばあさんの存在が家族の円満な生活に影を落とさずすんだという安心感がある。

オ、おばあさんが家族との新たな生活を拒否したことを意外に思う一方で、前向きに「ホーム」を選んでくれた心意気をさすがだと感心している。

問九 傍線部⑥「父親」と同じ人物を表している語句を、本文中から漢字一字で抜き出さない。

問十 傍線部⑦「宙にゆらりと大きな弧を描いて、下の芝生や花壇、庭木から遠ざかっていったピアノは、少女の目には、その時紛れもなく

空を泳いでいた」とあるが、この時の少女の心情の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ピアノの運搬作業を見届けたので、それが無事に終わったことを早くおばあさんに伝えてあげたい。

イ、家族の中に起こった複雑な事情を忘れるほど、ピアノが宙に浮く光景に引きつけられてしまった。

ウ、象が空を飛んでいたと主張する少年の気持ちだが、宙づりのピアノを見たことで理解できた気がする。

エ、ピアノが運び出されれば、おばあさんもようやく古い生活に踏ん切りをつけることができるだろう。

オ、ピアノが宙づりになったのははらはらしたが、父親と一緒にそれを見届けることができ誇らしい。